

# フッサール『イデーンⅡ』における世界と態度

鈴木康文

フッサールのいわゆる中期を代表する『イデーンⅡ』は、著作とすれば一九一二年に完成しながら、フッサールの思想の深化によつて結局出版に至らなかった。そのこともあって、『イデーンⅡ』の

①著作上の枠組は、不鮮明なままに終っている。『イデーンⅡ』の見かけは極めて単純な枠組をなしており、大きくは「自然の構成」と「精神世界の構成」に分かれ、前者はさらに二つに区分されて、「質料的自然の構成」と「動物的自然の構成」という二つの階層をなしている。つまり一見するとその記述は、物の世界、動物の世界、精神世界という三階層からなっている。しかしそのような見かけにもかかわらず、その内実はいろいろ推敲を加え続けた為もあって極めて錯綜しており、かならずしも整合性をもっているわけではない。

例えば上述した枠組から基礎づけ関係を推察する限り、精神科学は自然科学に基づけられることになりはすまいか。そこで本稿では『イデーンⅡ』を中心に、その当時フッサールが世界とその世界を主題とする諸学とのかわりをいかに捉えていたか、を考察していきたい。またそれに関わる課題として、その世界の中に生き、そし

てその世界を諸学の主題として位置付ける自我の態度を、見ていくことにする。

この問題を考えるに当って、まず触れておかなければならないことは、『イデーンⅡ』という著作の主題と枠組である。なぜならば、そのことの確認によつてその著作の中で述べられた世界なり自我なりの位置付けがあきらかとなり、それは彼の論述の制約を分析する最初の出发点を与えるからである。『イデーンⅡ』の構造を探るために、その手続きとして、最初に『イデーンⅠ』で触れられている『イデーンⅡ』のことを確認し、それによつて経験に対する学問と態度のかかわりを考察する。すなわち『イデーンⅡ』の内部での考察に留まるのではなく、出版された『イデーンⅠ』の、特に領域存在論と自然的態度の分析を踏まえた上で、『イデーンⅡ』をみていきたい。そして先ほどの疑問に答えるためにも、自然科学と精神科学という学問の研究対象である諸領域と、それらの学問に向かう態度とのかかわり、さらに諸学と諸学に先行する日常的な経験とのかかわりといった問題を取り扱いたいと思う。

まず『イデーニI』における領域概念および領域存在論、さらにその存在論における態度の問題を念頭におきつつ、考察に入ることにする。

『イデーニI』の最後に、次巻である『イデーニII』の予告と、その課題が示されていて、それによれば、「最近極めて活発に論議の行われている論争的問題、すなわち自然科学、心理学、精神科学といった名称が表示している大きな学問群の相互関係といった問題、特にそれらと現象学との関係<sup>(2)</sup>」が問われるのであり、またその著作において、「構成の問題をもっと具体的に捕まえ得る近みにもたらず機会<sup>(3)</sup>」が与えられる、と述べられている。そうした考察のためにこれまでのところ明らかになったことは、「事象内容を含んだすべての学問に関する、真正の意味で原理的な事柄のすべてにかかわりをもつような探求区域」が開かれ、ここでいう原理的事柄というのは、「領域理念を巡って、根本概念あるいは根本認識という形で取り集められるもの<sup>(4)</sup>」であるいは「領域存在論のうちでその体系的展開を見いだされるもの<sup>(4)</sup>」である。すなわち『イデーニI』の最初の章で示された「事実と本質」における領域や領域存在論が、その探求の基礎となっているわけである。また領域に基づいて、価値客体あるいは実践的客体、例えば国家、法といった文化形成体といったような「客体の構成は、空間事物性、および心理的主体の構成にその基礎をおく。すなわちそれらの客体は、まさに後者の実在のうちに基づけられているのである。結局、物理的実在が最低の段階とし

て、他の一切の実在の根底に存するのである。したがってたしかに、物質的自然の現象学には、ある際だった位置が与えられることになりはする<sup>(5)</sup>。」と述べられているように、その構造がさし当たりではあるが、『イデーニII』に引き継がれていると考えられる。

しかし領域とはなんであらうか。この問題を経験と領域の関係、および領域と経験科学との関係から考えてみよう。そしてその問題を、諸々の態度によって開かれた探求区分としてみることにしよう。あらかじめことわっておかなければならないことは、『イデーニII』の構造がより複雑に錯綜しているのは、この態度の問題がかわるためである。つまり、『イデーニI』における自然的態度と現象学的態度、『イデーニII』にはいつて新たに述べられることになる自然主義的態度と人格主義的態度といった諸々の態度の関係、およびこうした態度によって開かれた研究対象相互のかかわりが、問題化してくるわけである。さらにそれと相俟って、『イデーニII』で使われている領域概念が、実は単純に『イデーニI』の第一章「事実と本質」で分析されたような自然的態度による素朴な概念に留まっているわけではなく、『イデーニI』におけるその後の現象学的分析を踏まえていることが、より一層複雑化してくる要因となっているのである。

それでは『イデーニI』において領域概念、および自然的態度が、いかに記述されているのかを確認しておかなければならない。「自然的認識」というものは、経験とともに始まり、そして経験のうちに留まる。我々が「自然的」と呼ぶような理論的態度においては、可能的探求の全地平は、それゆえ一語で表示される。すなわち

それは世界である。この根源的態度による諸学問は、したがって全て世界に関する諸学問である<sup>(8)</sup>。ここで述べられている世界、および経験という概念は現象学特有の概念ではなく、一般的な概念であることに注意しなければならない。「世界とは、可能な経験のおよび経験認識の、諸対象の全総体である。つまり、顕在的な経験にもとづいて正しい理論的思考によって認識されるような諸対象の、全総体である<sup>(7)</sup>」。それゆえ「世界に関する学問、つまり自然的態度による学問」といわれるものとしては、「自然科学、心理物理的な自然を伴った動物的存在者に関する諸学問、生理学、精神科学<sup>(9)</sup>」が挙げられる。そこで、自然的態度において自然的世界は絶えず私にとって現にそこに存在している訳だが、私が時として算術的な世界やそれと似たような世界を我がものとした場合も、私は依然として、自然的世界の中にいる。このような点から明らかのように、自然的態度という態度は、『イデーンⅠ』では、単に日常に生きる態度であるばかりでなく、経験科学を遂行する態度でもあり、しかもそれは、けっして自然科学に留まるものではなく精神科学に対しても妥当しているのである。それではこの経験と経験科学とのかわりを、フッサールはいかに捉えていたのであろうか。「具体的な経験の対象性はどれもみな、質料的な本質をそなえているわけだから、ある最上位の質料的類に、つまり経験の対象のある〈領域〉に組み入れられることになる。その純粹な領域的本質には、そこで次には、なんらかの領域的形相学が対応することになる。あるいはその学を言い替えて、これをまた領域的存在論と呼ぶことができる<sup>(10)</sup>」。このように領域存在論は、経験の本質構造を分析する本質学

であり、この領域存在論の上に経験的な諸学は基礎付けられなければならない<sup>(11)</sup>。この領域存在論と経験科学の関係については次のように捉えられる。「あらゆる学問は、その領界<sup>(12)</sup> (Grenz) を経験の諸対象の総体としてもつ。そして学問はこの領界を自分自身で与えるのではない。そうではなく、経験の中での存在者は比較可能性と差異性という構造のうちで生じることによって、領界はその学にあらかじめすでに与えられている。すなわちその構造はアプリオリに経験科学に先行し、その問いの領界を限界<sup>(13)</sup> (Grenze) づけている<sup>(12)</sup>」。ただ経験科学の基礎になっているのは、その学の根本概念を解明する領域存在論であるといっても、「もちろんそのような領域存在論はあらゆる経験科学の前に下図が描かれうる、という意味に理解されてはならない。領域存在論の企ては、むしろそのもとにおいて学の領界がそれぞれ画定されることができ、また画定されたその条件を、後からの反省から生じる<sup>(13)</sup>」ことに注意しなければならない。『イデーンⅡ』は、経験の現象学的分析を踏まえたうえでの領域存在論を意図したものであり、それゆえ諸々の学問群の基礎付けや相互関係を考えたりすることが可能となるのである。しかし『イデーンⅡ』が領域存在論として構想されたものであるということは、その論述はあくまでも自然的態度に基づいていることに注意しておかなければならない。しかしここでいう自然的態度とは、いかなる態度として規定されているのであろうか。「自然的態度の一般定位によって、實在の周囲世界が、常にただ単に総じて統握的に意識されるのではなく、現にそこに存在する〈現実〉として意識される<sup>(14)</sup>」。このように自然的態度は、この一般定位ということが特徴であり、この一般定位を

遮断することが現象学的態度なのである。ここで確認しておきたいことは、自然的態度は、あくまでも現象学的態度に対立する態度として規定されているのであり、『イデーンⅠ』においては現象学的態度に先行する態度の全てが自然的態度なのである。以上のことからあきらかとなったことは、自然的態度は日常的な態度ばかりか、その経験の本質構造を探究する領域存在論にも当てはまり、さらにこの領域に基づく経験諸科学もこの態度に則っている。『イデーンⅠ』によれば、経験の本質を領域存在論という形で形相的還元によって分析し、そのことによって個別科学の基礎付けを見ることが、『イデーンⅡ』の課題として残されたわけである。

ここでようやく我々は『イデーンⅠ』を離れ、『イデーンⅡ』の中にはいつてその構造を具体的に考察するに至る。特にそこで新たに述べられることになる自然主義的態度と、人格主義的態度について、自然的態度とのかかりから考えてみることにする。

## 2

すでに述べたように、『イデーンⅡ』は三編に分かれており、第一編「質料的自然の構成」、第二編「動物的自然の構成」が自然主義的態度のもとに記述されており、それに対して第三編「精神世界の構成」は、人格主義的態度という態度から論議されている。まずここでは自然主義的態度とその態度による領域存在論、およびそれに基づく科学について考えてみよう。

自然主義的態度が課題とする領域は、自然科学の対象としての自然であり、それは、「総体的な時空へ世界全て」、可能な経験の総体

区域である<sup>(15)</sup>。しかしこの時空的に実在する世界という自然において、「我々が好ましき、美しき、有用き、実践的なふさわしき、完全さという名のもとに、諸々の物について語るような全述語は、全く考慮の外におかれている」<sup>(16)</sup>。それゆえ自然は、あくまでも理論的に捉えられるもののみに関心を向けることによってあらわれてくる「単なる事象」のことであり、自然科学的に直観し、思考する主観の態度において遂行された経験の志向的相関である<sup>(17)</sup>。そこでは、この自然界の経験を主題化する態度である自然主義的態度によって捨象された諸内容を、いかに捉えなおすかが問題となる。自然主義的態度は、理論的ドクサの態度ともいわれるが、こうした態度以外にも、あるものを価値づける態度や、実践的態度というものを態度として考えることができる。こうした態度において我々は、価値あるものや美的なものに対して、ある感情を示し、その中に我々は生きているのである。それはあきらかに理論的態度ではない。しかし我々は、そこで現れた価値や美に対して理論的な態度をとることも可能で、そのばあい実践的な態度から理論的な態度へ、態度変更しているわけである。例えば我々は、美しい星空を眺めることによって感動し、しかもその美しさやさらには美そのものについて理論的な考察をすることもできる。そこで自然主義的態度という理論的態度は、そのほかの態度に対してある優位性をもつとみなされる。「単に感覚的な直観作用において、最低次の直観作用に専心し、その直観作用を理論的に遂行して、我々は、ある単なる事象をもっとも端的な仕方では理論的に把握した。美的な価値把握や価値評価へと移行すると、我々は単なる事象以上のものをもつ。我々は価値の相在の

性質（乃至は明白な述語）を伴う対象をもつ。我々はある価値的な対象をもつ。この価値客体は、その対象的な意味の中に価値性という相在の性質をもとに含んでいるわけだが、それは理論的な価値把握の相関項である。それゆえそれはより高次の段階の客体である<sup>18)</sup>。つまり価値客体は、ここでは理論的態度の相関である単なる対象に基づけられたものである、と捉えられるわけである。こうした態度においては単なる対象、つまり自然が基づけるものであり、それ以外の価値や美という性質は、その基づけを通して理論化されることになる。以上のように、自然主義的態度のある種の優位性が確認されるときに、その態度に基づく単なる対象の探求が始まる。ここではその詳細な分析は本稿の課題を越えるので、単にこの自然主義的態度による自然の規定の仕方を確認するにとどめることにする。

まずフッサールは、先に述べた自然を、質料的自然と動物的自然に区別する。前者はいわゆる実在する物の世界をさし、それに対して後者はより広い意味での自然であり、心的実在を意味している。この動物的自然、あるいは精神的自然は、ある複合であり、それは先の延長をその本質とする質料的自然を下位の層とし、延長を排除するような本質をもつ上位層からなる複合である<sup>19)</sup>。この動物的自然の上位層は下位の層に基づけられており、質料的な実在を前提としてその質料的実在からは分離不可能な実在である。我々はまず最初に質料的自然の特徴を洗い出し、しかる後にそれに基づいた動物的自然を考察してみよう。

すでに触れたように、フッサールはここでは自然がいかにして自然科学の研究対象として位置づけられるにいったったか、を問題設定

している。それをもっとも低次の感性的なものから説き起こし、それから状況との因果関係、身体との因果関係等々を踏まえて、物は諸々の変化によっても同一性を保つ客観的なものであることを確認し、さらにその客観的な物は、単に個人的な物ではなく複数の主観にとっても客観的な物であることを捉えることによってあきらかにしようとしている。

まずあらゆる物の存在は、時間の持続性と実在的な徴表に区別され、後者に関しては、空間の延長、および質料性において考察される<sup>20)</sup>。物の延長的規定は大きさ、形態等々が挙げられるが、それに対して質料的な規定としては、実在物を充実させる性質を表す色、重さ、匂い、手触りなどが考えられる。『イデーⅡ』では特に質料性から実在を考察している。

質料的な物は、まず論理的なカテゴリーのもとは個体そのものであり、その上に変化を意味する個体の特徴、状況、出来事、関係、集団等々がかかわっている<sup>21)</sup>。質料的な物を、まずそれ自身として取り出して考察するなら、それは静止し性質的に変わらない同一性を保つものとして現れる。そして本質上、その物は、運動と静止、変化と不変化の可能性を根拠づけている。つまり我々はなにかが変化したり運動したりすることを見ている場合、そこでは常にある同一性のもとにその変化を確認しているのである。例えばある物が空間内で落下している場合、物そのものの形状は同一性を保ちつつ変わっているのは物の位置だけである、と認識される。さらにまたこうした変化における同一性ということは、単にその物単独の変化ばかりでなく、状況との因果関係においても成立する。例えばフ

ツサールは、色が状況に応じて変化することを、例として挙げている。物は日光のもとや曇りのもと、戸棚の暗さのなかといったいろいろの照明の違いによって、見え方が異なる。しかしその色の見え方は全く任意で恣意的であるのではなく、ある一定性が見られる。<sup>(22)</sup>つまり同じ状況のもとでは同じ結果が生じ、光に関する状況の変化が同じなら色彩の変化も同じという因果関係が見られる。そしてそのことを通して視覚的な特徴も、光源による照明の変化においてその統一と規定が保持され、それが実在する客観的な色として構成される。ツサールはこうした状況への依存関係自身、単に仮定されたものではなく、見られ知覚された因果性とみなしている。<sup>(23)</sup>つまり

実在もしくは実体と因果性は不可分に連関しているのである。<sup>(24)</sup>

さてツサールは、因果的な状況依存性のなかに身体も含め、身体の変化に物の変化が対応するという依存関係が成立する、とみなしている。これを彼は、「心理物理的な因果関係」と名付けている。例えばその例として、薬品を使用したり、火傷をしたりすることによって、感覚器官としての身体がいわば異常な状態になることを考察している。ここでは火傷の例を見ているが、指を火傷するという物理的变化によって、その指で触れた物は触覚感覚による現出として、火傷以前とは全く異なる結果をもつ。無論この場合、火傷という異常な物理的变化が、異常な物の現れを生じせしめるのである、そうした事態は、あくまでも異常性として心理物理的に因果性が規定され、その因果性は正常な事態を廻行的に証示する。

このようにして、主観性によって経験されるいわば相対的で直観的な物のなかで、客観的な物が告知される。無論いまままで述べたこ

とは、あくまでも主観的独我論的な議論に留まっている。物の存在に關して、それが仮象であるかそれとも現実性をもつかといった区別に關しては、なんらその根拠が示されていない。このような問題にかかわる客観的な物の同一性という問題、さらにたんに客観的な物ばかりでなく、そうした物の総体である客観的な自然の構成は、相互主観性のなかでその可能性が探求されるのである。すなわち複数の主観による確認において、真の客観性が確認されるわけである。

極めて簡単に素描した自然概念であるが、あらかじめ断っておいたように、ここで記述されたことは、あくまでも自然主義的態度のもとでの物の総体としての自然であった。そのため上で述べられた身体ということもあくまでも物の一つとしての身体物体であり、また独我論的あるいは相互主観的ということも自然主義的態度のなかで論議されたものであって、けっして現象学的態度における独我論、あるいは相互主観性を意味しない。(ただし『イデーニI』で述べられる領域概念は、素朴な意味での領域概念だとはいえない。つまりそれはあくまでも『イデーニI』の現象学的な分析を踏まえた上での領域概念であり、それゆえ自然主義的態度を踏み越えた現象学的態度の議論が随所でなされている。)しかし以上の点からも示されるように、自然というものの領域の客観性と心的なものとの連関が課題として明らかになった。

我々はつぎに心の本質の探求に移る。心は、質料的な身体との結び付きにおいて、自然科学の研究対象となる。つまり心はそれ自身で一つの領域を形成しているのではなく、あくまでも身体との結合

において主題化されなければならない。「我々は、(……) 實在性の第二のあり方として質料的自然に対抗させなければならないのは、単なる心ではなく、身体と心の具体的統一、つまり人間の(動物的)主体である」。<sup>(25)</sup> フッサールがこのように述べるのも、心的實在がそのなかだけで動くわけではないからである。つまり心的實在は、身体と結びついて質料的自然から影響を与えられ、また逆に質料的自然を動かすからである。(ただしここでは、態度の問題とその態度による世界の記述に論を限定しているので、詳細な身体的位置づけについて考察することはできない。)

心的實在と質料的實在という二つの實在領域が示されたことになるが、ここで両者の同一性と差異性を簡単に記述することによって、心的實在へ考察を進めよう。すでに述べたように、物の総体である質料的自然は実体として規定され、ある形態、大きさといった型において、その性質が記述された。それゆえ物は、諸々の部分へ分割可能である。これに対して、心は上述した物の特質を持ち合わせていない。心は、物のような超越的な統一、自体存在ではなく、<sup>(26)</sup>「内在的な体験の流れである内在的に知覚可能な体験に他ならない」。<sup>(26)</sup> つまり心は、意識の流れにおいて存在するので、物のように分割することもできず、ある型において規定することもできない。

しかし心的生はその統一を自らのなかにもっている。なるほど体験は常に流れることによって変化し多様であるが、「どの体験も時間的な配置を後に残し、心的實在に関して新たなものを生み出す」。<sup>(27)</sup> こうした連関がなりたつ意味において、心的實在は統一性をもっている。それでは因果性はどうか。無論こうした心に、質料

的な自然に妥当する因果性をそのまま当てはめることはできない。しかし心は身体との依存関係がなりたっており、さらに質料的な自然の状況に依存している。逆に心的な出来事は心理物理的な法則のなかで、物理的な自然に結果をもつことになる。<sup>(28)</sup> このようにある實在が別の實在に依存しているという形式において、實在的な状況を見ることができ、それが因果性として位置づけられているのである。

以上によって心的な實在である動物的自然の記述がなされ、それは自然科学的な心理学の研究対象として規定された。そしてそれと質料的自然とが、自然という領域を形成し、因果性のもと自然科学へ向かう基盤をなしているのである。しかし科学あるいは学といった場合、けっして自然科学にのみ限定されるものではなく、精神諸科学をも考察しなければならない。フッサールは『イデーニ II』の第三編では、その学の課題である精神世界について探求し、しかも上述した自然主義的態度とは異なった人格主義的態度という新たな態度をその学の根拠としている。我々は次に、この人格主義に基づいて精神世界がいかに記述されているかを考察してみよう。そしてその素描が終った後で、課題である態度の問題とその態度による諸々の世界の位置づけ、さらにその世界を主題とする学の独自性を考えることにする。

### 3

ここ迄で自然主義的態度とそれに相関する自然を規定した。それによれば、人間も自然のなかの一つの物として、因果関係のなかで示された。それに対し次に述べる人格主義態度は、その態度の相関

として精神が挙げられる。そこでは人間は精神世界の人格として現れる。フッサールは両者の態度の関係を、さしあたりは以下のように規定している。「我々が、互いに生きていて、語り合い、互いに挨拶で手をさしだすとき、(……)我々は常に人格主義的態度の中にいる。同様に、我々が我々のまわりの諸事物を、まさに我々の周囲として見、自然科学のように〈客観的な〉自然として見ないとき、我々は人格主義的な態度の中にいる」。(29)つまりここでは人格主義的な態度は、全くの日常的な態度として述べられており、その態度は本来選択された態度ではなく、むしろ世界を直接に所有するあり方なのである。(30)この人格主義的態度は、その意味で「自然的であり、人為的態度ではない」。(31)ここで述べられた人為的態度というのが自然主義的態度のことであり、両者の態度は並列する態度ではなく、対立し、人格主義的態度がある優位性をもつものとして語られる。すでに述べたように自然主義的態度は、美しさとか有用性といった客観的に規定されえない性質を捨象して単なる事象、つまり自然のみを見ている。それはある種の目隠しをもっているのである。しかし自然科学を遂行している研究者も、研究を離れば人格として他者と同じ様に生き、自分が「周囲世界の主体」であることを知っている。そこからフッサールは「自然主義的態度は、人格主義的態度に従属し、抽象によって、あるいはむしろ人格的自我の自己忘却によってある種の自律性を獲得し、それと同時に自己の世界、自然を不当に絶対化している」(32)と述べている。人格主義的態度は、自然主義的態度に先行し、それをなりたせる基盤をなしている。そして人格も、けっして自然主義的態度による心理物理的な意味での物に

従属する心ではなく、逆に人格からこうした物と心といった規定の仕方をつかえなおさなければならない。それで人格的自我が自己忘却していない状態へと舞い戻らなければならない。

人格主義的態度における人格的自我と周囲世界という概念は、お互いにかかわり合っていて分離不能である。(33)つまり、ここでの周囲世界は、「この人格的自我が意識しており、その自我にとってそこにあり、自我がさまざまにかかわり合っている。例えば、主題的に経験したり、自我に現出するものに関して理論化したり、感じたり、評価したり、行為したり、技術的に形作ったり等々してかかわり合っている」。(34)周囲世界は、あくまでも人格とのかかわりにおける世界であり、その世界は人格のいろいろな関心作用によってさまざまに経験されるわけで、先の自然主義的態度もその一つに過ぎないわけである。それゆえ周囲世界は、けっして世界「それ自身」ではなく、「私にとっての」世界、その自我主体の周囲世界である。自我主体によって経験され、またさまざまな仕方でも意識されて、そのどのような感覚内容を伴う志向的体験の中で指定された世界である。(35)周囲世界は、人格的意識の志向の対象として、人格によって見られ、考えられ、あるいは経験された世界なのである。人格と周囲世界とは、あくまでも志向性の連関の中で語られるものであり、その連関を規定している原則をフッサールは「動機づけ関係」と呼んでいる。しかし人格的自我は、意識の上では彼の周囲世界の中に物ばかりではなく、別の主体をも見いだす。この場合、他者の現実存在を了解的に経験する際に、我々は他者を直ちに人格的主体として理解する。(36)つまりここでは我々は、自然主義的態度のように他者を自然的



対象として扱い、まず身体を物の一つとし、次にその身体を介して心を捉えるということはない。他者の人格は端的に周囲世界の主観として措定される。この場合人格は、けっして一方的な動機づけ関係ではなく、「お互いに対して〈動機づける力〉をもっている」<sup>(37)</sup>。

ここで具体的にはコミュニケーションのことが考えられており、ここではお互いの理解や承認によって構成される周囲世界が成立している。「どの人格もあらゆる承認関係やその中に基礎付ける統覚を無視しうる限りで、あるいはむしろこれらを分離して考えうる限りで、人格は交わりの周囲世界の内部で、孤独な周囲世界をもつ」<sup>(38)</sup>。つまりここで注意しなければならないことは、まず孤立した人格が

周囲世界をもち、次にそれを基盤にして共同的な周囲世界があるというわけではないということである。それはいわば記述の展開の上でそうなっているに過ぎない。それで先に述べられた個人の周囲世界よりも広い、どの人格個人に対しても「開かれた地平を伴った周囲世界」が構成される。これが共同の周囲世界として、「精神世界」といわれるものであり、精神科学の対象なのである。それは一部は顕在的、一部は潜在的なコミュニケーションの中にある諸主体に対して構成された世界を意味する。ここでは地平性はあくまでも理念的な潜在性として述べられている。そしてこの人格の統一は、社会的な主観性の集まりとして構成されるばかりでなく、内的に組織化された社会的な主観性として密接にかかわり合っている。すなわち精神世界は、諸々の人格的個人がもつ周囲世界の寄せ集めといったものではなく、統一化され、かれらにとって同一の世界として構成されている。人格はこの精神世界の一員として成立しているわけ

ある。

最後に周囲世界、および精神世界の原理をなす動機づけについて簡単に触れておこう。動機づけは、「<sup>(39)</sup>なので、<sup>(40)</sup>である」(Well-So)として規定される「精神的な法則」である。この場合の生とは、知覚レベルから、精神科学における理由と結果の判断に至るまでの、あらゆる連関を示している。最低次の動機づけとしては、意識の流れにおける潜在的で受動的に働いている連関が考えられ、「連合」あるいは「習慣」といわれることがそれに当たる。それに對して顕在的、能動的な動機づけは、「理性の動機づけ」といわれ、諸々の態度決定にかかわる。精神諸科学、例えば歴史、社会科学、文化研究は、この動機づけを研究の法則原理としてなりたっているのである。人格主義的態度は、日常世界における生き方から、精神科学を形成する態度に至るまでを含む態度であり、その特徴は動機づけの中で生きることである。

#### 4

以上で我々は、領域存在論に基づいて、『イデーンⅡ』の構造を素描した。そこでこの考察を終るに当って、最後に改めて領域としての諸々の世界とその世界を研究対象とする学、そしてその領域へとむかう態度の問題をとりあげてみたい。特に領域存在論の形成と自然主義的態度、人格主義的態度といった態度問題を、学とのかかわりから考察して行きたい。

まず指摘しておかなければならないことは、自然的態度と自然主義的態度、および人格主義的態度の位置づけである。自然的態度は、

『イデーニー』による限り現象学的態度に対立する態度であつて、現象学的態度から見る限り素朴な態度であつた。その素朴性といわれることは、対象へといわば直進的に向かう態度であつて、そこには、日常的な生き方ばかりか、諸々の科学へ向かう理論的態度もやはり自然的態度として述べられた。それゆゑ自然主義的態度や、あるいは人格主義的態度は、ともに自然的態度のなかに含まれることになる。それゆゑ先に述べた人格主義的態度が自然主義的態度にたいして優位性をもち、人格主義的な態度は人為的ではなく、自然的であるといわれるのも、個別科学に向かう人為性に対する日常的な自然性がいわれているわけで、「自然的」ということが広狭の二義になっている。自然主義的態度は、あくまでも理論的態度として人為的に留まるのに、人格主義的態度は日常的な態度から精神科学に向かう理論的態度をとみに含んでいるのであり、人格主義的態度の優位性もそこから捉えなければならぬ。フッサールもある草稿で、自然科学と精神科学に向かう態度をとみに理論的態度として規定しているのに対し、ごく日常的な態度として精神の生の態度は、理論的に規定する態度ではない、と述べている。<sup>(43)</sup> それに対してランドグレーベは、人格主義的態度と自然的態度とを完全に同一視し、それはともに選択された態度とはいえない、日常的な生き方であると捉えている。そしてこの日常性に対立する態度として、自然主義的態度を規定している。<sup>(42)</sup> しかしこのような態度に関する見方では、『イデーニー』で本来主題とみなされた諸科学の位置づけが不明となるであらう。特に人格主義的態度と精神科学のかかわりがいかなるものか不明瞭になる。なるほど人格主義的態度は日常的な生き方

を含むものであらう。しかし人格主義的態度が全く日常的な生き方にしか過ぎないものであるなら、そのような態度がいったいかにして精神科学をなりたしめているようになるのか規定できなくなる。人格主義的態度は動機づけ関係に基づき、それは日常生活から精神科学に向かう態度に至るまで貫いているのである。

このように見ていくと、ワルデンフェルスのいうように世界は三重に区分されることになる。<sup>(43)</sup> 世界はまず前理論的で直観的に現れるまさに日常的な世界である。この世界を探索することは、いわゆる後期フッサールの生活世界論へ展開していくことになる。第二に世界は自然科学の主題として規定されうる自然を意味する。この自然は最初の日常的な世界から自然主義的態度によって開示されたものである。そしてこの自然は、第一に質料的な自然であり、それに基づいて動物的自然が構築される。そしてこの両者の自然を貫く原理が因果性であつた。この因果性に基づく自然に対立する世界として、第三の精神世界が位置づけられる。それは文化的形成体であり、諸々の精神科学の主題となるものである。この第三の世界と最初の世界が、一方は理論的、他方は前理論的であるが、人格主義的態度として規定された。この態度に共通する原理が動機づけであり、精神科学はこの原理に基づいて探求されるのである。<sup>(44)</sup>

こうして自然科学と精神科学という学の研究対象と、各々の科学の原理がさしあたり示されたことになる。しかしここで注意しておかなければならないことは、例えば自然主義的態度によって自然科学の学としての主題領域が成立するといつても、それゆゑ直ちに自然主義的態度が自然科学を遂行する方法的態度ではないということ

である。そのことはのちに『危機』で示されるように、自然科学はいわゆる経験の直観を離れたところで成立しているものであり、形式存在論を踏まえた上で極限理念を構築し、そのことによってその普遍性をなりたたせているのである。<sup>(45)</sup> それに對し、ここで述べられた自然科学的態度は、なるほど価値的なものや有為性を捨象して単なる物のみに関心を向けるものであるが、そうすることによって直ちに自然科学がなりたつことはないのである。自然科学的態度はあくまでも領域存在論のなかで論議されている。領域は経験についての本質直観によって成立するが、それとともにそれが学の研究対象として学にあらかじめ与えられることになった。それゆえ領域は常に二重性を帯びているわけであり、自然科学的態度も人格主義的態度も、領域のこの二重性のなから語られたことに注意しなければならない。

なおさらに諸々の科学に基盤をもつ哲学的解釈も、こうした点から見る事ができよう。すなわち全てを自然とみなす自然主義や、あるいはあらゆるものは歴史の所産であると捉える歴史主義といった哲学的な見方も、その学にあらかじめ与えられた領域のその先所与性を無視して不当に絶対化すること起因するのである。<sup>(46)</sup> それらの哲学的解釈は、そのつどの領域の本質規定である因果性、あるいは動機づけを全ての領域に適用可能な原理とみなすわけであり、そうした解釈は批判されるべきものといえよう。

それではフッサールは、現象学自身をいかなる学として規定しているのだろうか。フッサールは現象学を精神科学の一つ、しかも「普遍的で絶対的な精神科学」<sup>(47)</sup>と述べている。現象学もまた、精神

科学の原理である動機づけ関係を主軸にして考察がなされる。しかし現象学は、みずからの主題である精神を単に素朴に受け入れて探求するのではなく、その素朴性、先所与性を学の課題とするがゆえに普遍的といわれるのである。

我々は、『イデーⅡ』における領域世界を中心に、それを巡る種々の学の主題とその主題が形成される態度を、そのつどあきらかにしていった。そこで次に具体的な分析として、領域の内部に踏み込み、自我に纏わる心身論と人格を問わなければならないが、それは稿を改めて考察しなければならない。

## 注

本文中に引用するフッサールの原典該当箇所に関して、"Husserliana" は〈H〉、"Philosophie als strenge Wissenschaft" は〈PSW〉の略記号を用いる。なお巻数番号はローマ数字、頁番号はアラビア数字によって表示する。

(1) Fink, E., Die Spätphilosophie Husserls in der Freiburger Zeit, in: Nähe und Distanz. Phänomenologische Vorträge und Aufsätze, Alber, 1976, S. 206.

(2) H. III. 355. (3) H. III. 355.

(4) H. III. 356. (5) H. III. 354.

(6) H. III. 10. (7) H. III. 11.

(8) H. III. 11. (9) H. III. 59.

(10) H. III. 23. (11) H. III. 38.

(12) Landgrebe, L., Seinsregionen und regionale Ontologien

in Husserls Phänomenologie, in : Der Weg der Phänomenologie. Das Problem einer ursprünglichen Erfahrung, Gütersloh, Mohr, 1963, S. 144.

- (31) Ebenda. S. 145.
- (4) H. III. 62. (5) H. IV. 1.
- (31) H. IV. 2. (17) H. IV. 2.
- (31) H. IV. 9. (61) H. IV. 29.
- (30) Vgl. H. IV. 128f. (12) H. IV. 34.
- (32) H. IV. 41. (32) Vgl. H. IV. 42.
- (24) H. IV. 45. (22) H. IV. 139.
- (26) H. IV. 131. (22) H. IV. 133.
- (38) H. IV. 132. (32) H. IV. 183.
- (35) Landgrebe, L., Die Phänomenologie der Leiblichkeit und das Problem der Materie, in : Landgrebe, L. (Hrsg.), *Beispiele*, Nijhoff, 1965, S. 293.
- (12) H. IV. 183. (32) H. IV. 183f.
- (32) H. IV. 185. (4) H. IV. 185.
- (35) H. IV. 186. (36) H. IV. 191.
- (32) H. IV. 192. (38) H. IV. 193.
- (32) H. IV. 196. (40) H. IV. 220.
- (41) H. IV. 355.
- (34) Landgrebe, L., a. a. O. S. 293.
- (34) Waldenfels, B., Intentionalität und Kausalität, in : *Der Spielraum der Verhaltens*, Suhrkamp, 1980, S. 102.

(44) シンクレーブは自然科学の学の対象として規定された産物である自然と日常的な周囲世界との違いを強調するが、精神科学の課題である精神世界と周囲世界との位置づけにかんしては、いさゝか配慮を欠いてゐる。Landgrebe, L., a. a. O. S. 298.

(45) 参照。拙論「フッサールにおける科学の方法の問題」、『哲学・思想論叢』(筑波大学哲学・思想学会)第四号、一九八六年。

(46) Vgl. PSW. 49f. H. III. 107.

(47) H. IV. 354.

(47) 哲学・思想論叢 筑波大学大学院哲学・思想研究科